

季節の お便り



人々が作り続けていく、港まちの名物



上の写真は、今年のみなと祭の総踊りの様子。

まち協事務局では、みなと祭で踊ったあの曲が頭から離れないスタッフたちが、鼻歌まじりでデスクに向かっています。みなと祭には、やはり強烈な魅力があるようです。江川線に溢れていたあの人だかり、総踊りで見上げたあの花火、港まちの皆さんのあの笑顔。次は地藏盆まつり。またみんなで踊りたいねーと盛り上がりつつあるところです。

さて、今号のテーマは、「港まちの名物」。未来に向けて新しい港まちの美味しい名物を作るため、懐かしのとんすばをとりあげた特集ページ。皆さんのおかげで温故知新の楽しい企画となりました。港まちの日常の何気ない会話を取り上げる「ヒト×ヒト」では、三代続く港まち唯一の魚屋さんが舞台に。一日密着取材の「港まちビープル」では、あのお店のメインシェフが登場。いずれもご登場いただいた方々の人柄がにじむ素敵な紙面となりました。名物というと、一般的には特別な何かを指すのかもしれませんが、日常の中には何気ない楽しさやおかしさがあり、そんな小さな一つひとつもまた私たちに元気をくれる名物といえるかもしれません。「港のきおく」では、築地神社を取材。そこには、港まちに暮らす人々が心をひとつに合わせるために建立した、とっておきの名物と呼ぶにふさわしい物語がありました。

そして紙面を彩る数々の写真は、言わずと知れた名古屋の夏の名物、みなと祭。今号も主役は港まちの皆さんです。どうぞじっくりとお楽しみ下さいませ。

港まちピープル

中国食房「凜」メインシェフ
山田久歩さん

昼はお値打ちなランチ、夜は本格中華と豊富な銘酒が評判の中国食房「凜」。8年前のオープンから厨房に立ち人気店の味を守るメインシェフの山田久歩さんは、仕事仲間や常連さんたちから「山ちゃん」と呼ばれ親しまれています。汗を流して仕事を出す山ちゃんのある夏の1日をご紹介します。

港の人気店「凜」のメインシェフ・山ちゃんの1日



12:30

厨房で大忙し

厨房の中央には巨大な寸胴。ここが山ちゃんの定位置。真夏の厨房はまさに灼熱。額汗を拭いながら絡々とするオーダーを片手よくこなす姿はまさにベテラン料理人。大きな中華鍋とおたまでダイナミックに調理する中華は一見、大雑把に見えて実はとても繊細。分量で調味料を量れるようになるには経験あるのみと山ちゃん。

15:00 店員さん揃ってお昼ご飯



開店は午前11時。ランチタイムには毎日行列ができるほどの人気ぶりでお店のみなさんがお昼ご飯を食べられるのは午後3時すぎ。厨房にある食材を見てその日のまかないメニューを決めるという山ちゃんは、パスタやどんぶりものなど中華以外の料理もお手のもの。でも本当は「作るより食べる方が得意！」

16:00 港までお散歩



休憩時間に余裕ができたときは近くの港までふらっとお散歩に出かけることも。「凜」のオープンと同時に港まちに暮らして8年。それまで港に来ることはほとんどなかったけれど「のんびりした雲間気とこの独特の空気がとても落ち着く」のだそう。住みやすいこのまちがいまではどこよりもお気に入り。

15:30 八百屋さんへ買い出し



いつでも新鮮な野菜が揃う八百屋さん「ぜんめいや」。普段は電話で注文して配達してもらうことが多いけれど、時間があれば自ら足を運んで吟味。豚豚など定番のメニューでも季節ごとに使う野菜を変えたりしてお客さんを飽きさせない工夫も。「ここはたくさん買おうとまけてくれるのもうれしい」と思わずにっこり笑顔の山ちゃん。

23:00 二十番でご近所さんと談笑



「凜」のオーナーの実家でもある築地口の中継料理店「二十番」は、お休みの日や仕事が終わった後などにゆっくり立寄りおなじみのお店。味はもちろんのこと、ボリューム感たっぷりなところがお気に入り。常連さんはみんな顔なじみの人ばかりなので、いつもおしゃべりに花が咲きます。

ヒト×ヒト

魚銀



村上弘子さん(左・お客さん)／港まちで生まれ育った生粋のみなとっ子。間もなく銀婚式を迎えるご主人と息子さん夫婦と同居の5人家族。魚銀の奥さんとは結婚前の花嫁修業中に知り合い、いまもずっと仲よし。
村玉江さん(右・魚銀の奥さん)／名港市場があった当時、ご主人が働くお店のお隣で陳列やたまりを売っていた玉江さん。その姿を見初められて結婚。お酒も煙草もやらない真面目なところが好きという優しいご主人と二人仲良くお店を切り盛り。

市場直送！鮮度と元気な笑顔が売り！

いつでも新鮮な魚が揃うと地元で評判の「魚銀」。嫁いってから今日まで、明るく笑顔でお客さんをお出迎える奥さんの玉江さんと常連客の村上さんはお互いに結婚する前からの友人同士。今では何でも言い合える仲なのです。

- * 魚銀は創業から何年？
村玉江さん もう何年になるかね。うちの代で3代目になるね。おじいちゃんが始めたのが戦後すぐのころ。それからずっとここでやってる。
- * 奥さんは嫁いたときからお店に？
村玉江さん そうだよ。
- * 昔は看板娘。いまじゃ看板はばあになっちゃったけどね！
村玉江さん 私は二十歳と一週間でこへ来ましたから。その時はそりやまだ若かったですよ。この人とはもう50年以上もつき合ってるの。結婚する前からの知り合いだから。そう。だからもう遠慮もないね。
- * 普段はどんなふうにお買い物？
村玉江さん いつもはケースの中をざっと見て良さそうな選んだら、お刺身もやります。いろいろだね。
- * お魚はいつもこちらで？
村玉江さん そう。ずっとここ。だって品物がいいもん！大きなスーパーで買うより新鮮だし味も全然違う。もうほかじゃあ買えんね。
- * 今日は何を？
村玉江さん 今日かね？今日は魚はいらん。うち、今日は肉の日だ。
- * ええっ！？
村玉江さん 確かにこんとこずーっと魚やってもらってるんだわ。昨日まで港のお祭りだったでしょう？寿司に刺身に、そんでその前は土用でうなぎもやってもらったし。
- * それで今日は肉の日。
村玉江さん お祭りも終わってまとも静かになったでしょう？今日はお店もちょっと落ち着いてるで遊びにきてもらったのよ。(店のご主人が奥から)
- でもせっかく写真撮ってもらったんで格好だけでもいいつもみだいに「これちょうだい」って買ってもらってあげようよ。と。そしたらこつちも適当に合わせてやっつくのに。
- 村玉江さん あら、そうね。ごめんごめん。(一同爆笑)

モノもの語り

みなと祭 で 見つけたモノ語り

屋形と揃いの浴衣が繋ぐまちの団結力

「名古屋みなと祭」の見所は、地元が繰り広げる屋形の曳き廻しと踊り。それぞれに趣向を凝らした屋形に太鼓を乗せて、賑やかに祭りを盛り上げます。みんなで力を合わせて曳く屋形は団結力の象徴のようです。まちの皆さんの晴れ姿と自慢の屋形を、当日の総踊り入場のアナウンスとともにご紹介します。

港元町
こうもとちよう



粋な浴衣の着流し姿、子ども達の可愛らしい法被、小太鼓の緑の法被、大太鼓を壮大に打ち鳴らす青年部の茶色の法被、屋形を安全に守る黄色の法被。屋形では三味線のリードで、鐘、小太鼓、大太鼓を取り備えてより一層賑やかに祭りを盛り上げます。

神頭町
じんとうちよう



神頭町の屋形の特徴は先頭のカラクリ人形。大須のカラクリや高山祭りの茶坊主カラクリなど、江戸時代のカラクリ人形を復活させた今は七代目「玉屋庄兵衛」氏の作品で、年に一度のお披露目です。操作するのはもちろん地元神頭町の皆さん。

高六
たかく



屋形は設計から制作まで、すべて町内会手作り。踊り、笛、鐘、太鼓、パフォーマンス、老いも若きも一緒になって楽しみ、祭りを盛り上げます。「踊るあほうに見るあほう、同じアホなら踊らにゃそんそん」が高六町内会の祭りに対する姿勢です。

真砂町
まさごちよう



古式ゆかしい提灯一式で飾られた屋形に、業の豊かな女性会の踊りと太鼓が自慢。今年の祭りは新調したばかりの浴衣と法被のお披露目となりました。

二号地西部
にこうちせいぶ



夏の暑さを吹き飛ばすように鉦と太鼓を打ち鳴らし、元気いっぱいの屋形「みなと丸」。昭和34年の建造以来、半世紀にわたってまちと人の絆をつむいできました。今年は法被を新調し、装いも新たに老いも若きもひとつになって港の夏と祭りを二号地西部の「みなと丸」が盛り上げます。

港本町一丁目
みなとほんまちいちちようめ



昭和30年、役員さんの尽力により宮大工が建造した屋形。純日本式で二階建ての組み立て式です。これからも維持管理に努力し、みなと祭に華を添えていきます。

二号地東部
にこうちとうぶ



みなと祭が始まり、最初に屋形を引いて練り歩いて以来、その歴史を刻んできた二号地東部。品良く涼しげな、港にふさわしい船をかたどった屋形の形状です。

第二東
だいにひがし



昭和62年に第二東町内会在住の船大工によって造られ、昭和63年の名古屋祭に初めて参加した由緒あるみこしです。現在でも大切に保管され、子ども達に愛されています。今日のためにお化粧してお披露目にやってきました。

リリーハイツ
りりーはいつ



老若男女、誰もが楽しく参加できる手作りの祭り、一度参加すればまた来年もリリーハイツで参加したくなる！がモットー。役員をはじめみんなが一丸となりアイデアを出し合い、創意工夫をし、一つひとつへ進んできました。一人一役、誰か一人欠けてもできない祭り。結束力は西薬地一番です。



各町内が持っている屋形は、それぞれに個性的な装飾が付いています。普段はしまわれている屋形も、年に1回この日のためにきれいに飾り付けられて、多くのまちの人々に曳かれながらまち中を巡り、祭りを盛り上げます。



「名古屋みなと祭」と言えば、多くの人々がイメージするのがこの花火。毎年約3千発の花火が名古屋港から打ち上げられ、人々の目を楽しませています。花火を背負って進むライトアップした屋形の姿は「圧巻」の一言。

港のきおく⑥

築地神社—地域の人がつくった心の拠り所

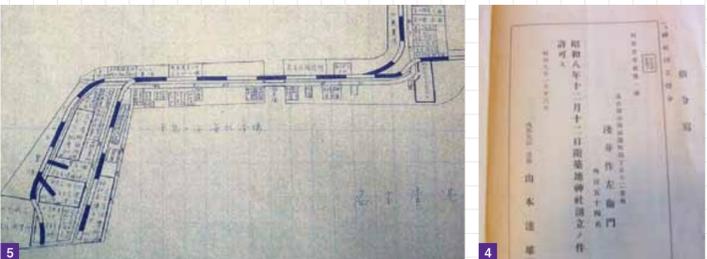
昭和13(1938)年、名古屋港の総鎮守として、熱田神宮から海をつかさどる神様、素戔嗚尊をいただいて創建された築地神社。75年の歴史には、折々の時代に神社を支え、心の拠り所とした地域の人の熱い思いが刻まれています。文/花島敦子



港とこの土地を守る
築地がほしい
昭和初期、名古屋港と西築地界隈は発展の真つただ中。港は着々と拡張工事が行われ、市電や臨港鉄道が走り、活気づくまちで商売を始めようと新しい住人がどんどんやってくる状況でした。そんな中、港全体の守護神として産土神社*1がほしいという声があがり、地元の人々が運動を始めます。共通の伝統も風習もない新しいまち、だからこそ人々の拠り所となる神社がほしい。その中心となったのは千代田組社長、浅井作左衛門でした。しかし神社創建は住民だけでは成し得ません。そこで相談したのが、名古屋港開港の最大の功労者として歴史に名を刻む奥田助七郎でした。

港の総鎮守を創設すれば、それが自身が協同事業であり、その後神社の行事で人々の心を一つにすることができると。それによって親睦が深まり、助け合う心が育まれていくだろうと助七郎は考え、住民の申し出に大賛成。さらに神社建設に向けて、一つの提案をしたのです。

- 昭和3(1928)年 ・千鳥ヶ浜海水浴場開場
- 昭和12(1937)年 ・名古屋港開港30周年
・名古屋汎太平洋平和博覧会開催
・港区誕生
- 昭和13(1938)年 ・築地神社鎮座
- 昭和16(1941)年 ・太平洋戦争勃発
- 昭和17(1942)年 ・熱田神宮より織殿(斎藤殿、熱田神宮旧神楽殿)をいただく。
- 昭和20(1945)年 ・終戦、築地神社被災に遭遇
- 昭和24(1949)年 ・織殿建築
- 昭和30(1955)年 ・千鳥ヶ浜海水浴場廃止
- 昭和32(1957)年 ・築地神社本殿再建



- 1 築地神社。大きく育った鎮守の地に囲まれて。
- 2 築地神社の建設を知らせる新聞記事。(昭和7年12月)
- 3 「最高の木材を使った見事な建物でしたよ」と、大原吉司が言う創建当時の築地神社。その図面が残されている。
- 4 神社建設の代表者、浅井作左衛門宛てに出された内務省からの神社建設の許可。昭和8年12月12日付で許可が下りている。
- 5 浜茶屋位置図。茶屋や食堂が並んでいる。(昭和30年名古屋市長住宅案内図帳港区)
- 6 名古屋港鳥瞰図(昭和12年頃 吉田初三郎画伯作)戦前最も活気があった頃の名古屋港。手前に千鳥ヶ浜海水浴場がある。
- 7 9号地上空から撮影した名古屋港。(昭和26年頃)
- 8 境内で行われた御馬塔の様子。昭和14、15年頃。(宇佐美早苗さん提供)3頭の馬は下村鉄工所の所有で、この後軍馬として召集された。「かわいそうだったね」。
- 9 戦後、築地神社再建に貢献した奥野敏治さん(後列中央)。学区の委員長、奉賛会会長を務めた。

*資料協力：築地神社、名古屋港管理組合、宇佐美早苗さん

敬い、感謝する気持ちを受け継ぐ
私たちの人々が熱望した築地神社境内では相模大会や御馬塔*2が人々を楽しませ、やがて参拝して出兵する地元若者をたくさん見

築地神社に残されている千鳥ヶ浜海水浴場の収支決算書を見ると、収入は売店や脱衣店から支出は立看板や万国旗、ポスターや給料...住民がきちんと管理運営していたことを物語っています。この積立金を元に神社建設が具体化していきます。浅井作左衛門ら住民代表は、創立委員となり熱田神宮へ、内務省へ、神社創立の許可を求めて奔走。土地を確保し、各町内にあった氏神様は順次合祀されていきました。そして昭和13(1938)年1月23日の深夜、熱田神宮から船で運ばれたご神体が築地神社に鎮座しました。

戦争(空襲)昭和20(1945)年の終戦。焼野原となったまち、一時的に港の機能が止まった名古屋港、築地神社も社務所を残して焼失。しかし人々はすぐに復興に向けて歩み始めます。「築地神社は地域の守護神だよ。この神社の神々に助けられ生かされていると私は思っている」。そう語るのには宇佐美早苗さん。高度成長へと発展する時代の中でも築地神社は地域の人のちともありました。

築地神社で石ワオッチング
築地神社の境内に至る所で目につくのが「石」。創建当初から残る石積みは三河湾海中の石。寄付をした地域の人や西築地小学校にも配られた。写真の石は名古屋城の石垣用のもの。船で運ぶ時堀川に落ちて、数百年後引き揚げたら名古屋城の石だった！

今回お話を
おうかがした
方々

【熱田西邸】
高羽 善さん

【築地神社】
大原 良彦 宮司

【港本町一丁目】
宇佐美 早苗 さん

名古屋城築城の際、石垣の築造を命じられた諸大名が、他の大名と自分の石を区別するため、さまざまな印をつけた。「上」の刻印が見える。

港まちレポート

めくるめくお祭りワールドへ、いざー！

「名古屋みなと祭」を中心として、港まちに巻き起こる非日常的なお祭りのムードを楽しんでいたためのキャンペーン、「港まちお祭りサマー2013」。「祭りのために一年がある」と口にする人も多いこの港まちの暑い夏をご紹介します。文／港まちづくり協議会事務局



1 「みなとヤレコノ」制作者の皆さん。祭りでは生演奏が！
 2 今年の踊りをみっちり覚える講習会。みんな真剣。
 3 毎晩の踊り練習が始まると、まちはすっかり祭りモードに。
 4 大ナゴヤ大学の授業では町内の浴衣を着て踊りを体験。
 5 ぐるぐるひたすら踊った宵まつり。これぞ盆踊り。
 6 宵まつりには、名古屋おもてなし武将隊の前田慶次様と元気！さん。
 7 踊りとともに、屋形の準備もみんなで進めます。
 8 市内内外からみなと祭に参加した皆さん。すっかり港まちの虜?!
 9 溢れる人のなかを、太鼓を打ち鳴らしながら屋形が通ります。
 10 みなと祭には、武将隊の加藤清正様、前田慶次様、亀吉さんが登場。
 11 約300名が踊る流し踊り。美しく動きが揃った姿は壮観。
 12 踊りながら総踊り会場へ入場。いよいよ花火の下で踊る踊る！
 13

みなとまちでヤレコノ！

西川流師範である西川千雅さんのプロデュースにより、マルチ三味線アーティストのたなかつとむさんと、にっぽんど真ん中祭りでもお馴染みの青山千果さんがコラボしてできたのが「踊り曲が「みなとヤレコノ」です。振り付けは、もちろん千雅さん。コンセプトは、老若男女みんなが楽しめること。この曲を通じて、参加するみなと祭の楽しみをより多くの人たちに伝えていくのが目的で、港まちらしい素敵なオリジナル曲となっています。

歌詞には、「ヤレコノ」と不思議なかけ声が出てきますが、どうやら伊勢のお祭りで盛んにあるかけ声なのだとか。「ごあんぜんに！」は港まち特有のご挨拶。みなと祭では、「ヤレコノ」「ごあんぜんに！」が港まち中から聞こえてきて、とっても楽しそうでした。

祭りへ向けて練習三昧の日々

6月に入ると、月曜日は「みなとヤレコノ」を習う講習会水曜日

「踊る みなと祭」授業開講

港まちづくり協議会では大ナゴヤ大学と協力して、「みなと祭の魅力」を発信する授業を開講し、港ま

ちの外からも祭りに参加してくれる方々を募集しました。この取り組みには、有志町内会の方々に協力を依頼し、授業では各町内の特徴や魅力を積極的にアピールしていただきました。結果として、参加を申し込んでくれた5人の方々は、迎え入れていただいた町内会の練習に通い、踊りを習得見事にみなと祭デビューを飾りました。

みんなの心がひとつに

そして今年も多くの人が訪れた「名古屋みなと祭」。港まちのメインストリートである海へと続く江川線には600程の屋台が並び、そこはまるで人の海。そのど真ん中を流し踊りで進んでいくパレードは圧巻。そして、花火の真下で踊る総踊りも最高潮の盛り上がりを見せました。

新たなチャレンジ

みなと祭の前夜に「みなと宵まつり」をスタートさせました。大勢の人々が溢れかえる祭り本番は、まちの人々もどこかよき行きの顔つきで気合いが入りますが、その前日の町内巡りの際には、自分たちのお祭りを楽しむリラックスしたムードが漂います。そんなアットホームな港まちの雰囲気もぜひ多くの人たちに味わって欲しい。そんな想いで始めたのがこの宵まつりでした。

当日は名古屋おもてなし武将隊のお二人が応援にかけつけてくれ、昼間には「武将とぶらり港まちめぐり」を開催して港まちのディープな魅力を紹介。これには武将のお二人も大興奮の様子で港まちの魅力に取り付かれたようでした。そして夜の宵まつりは、地元町内会

の皆さんのご協力もあり大盛況。はみなと祭に向けて新曲の民謡を習う講習会が行われました。毎回100名前後の地域の女性達が、西築地小学校の体育館に集まり、熱気の高まった練習が繰り広げられました。ここに集まった皆さんが、それぞれの町内に踊りを伝えることで、総勢300名を超える踊り子たちに踊りが伝承されていくのです。

7月になると、まちのあちこちの公園や神社からお囃子や太鼓の音色が響いてきます。日が落ちる頃には、町内のみんなが集まってきて輪になると練習会が始まります。それは、みなと祭が行われる直前まで毎晩続きます。かけ声をあげて太鼓に踊りに大活躍の子も達、嬉しそうにお手本を見せる大人達。こうしてみんな一緒に過ごした記憶は一生の宝物になるでしょう。

みなんで一緒に輪になって踊ることの楽しさに、改めて気がつかされたひとときでした。

お祭りサマーの締めくくりは、8月17日(土)に開催される「地蔵盆まつり」。踊りを覚えている人もそうでない人も気軽に参加できる盆踊りイベントです。お祭りワールドを体感しに、ぜひ港まちへお越しください！